

令和5年度 第2回農村 RMO 推進研究会(概要) (確認用)
2024年 1月 10日(水) 13時30分～16時30分
(オンライン開催)

【第2部】 ディスカッションの概要

<テーマ1> 農村 RMO の事業多角化の実態と意義

質問1：農村 RMO の事業を実施する上で、事務局のマネジメントはどのようにしているのか。

(誰が何人くらいで実施し、人件費はどうしているのか。)

【若菜委員】

【加子母むらづくり協議会】

- ・加子母村づくり協議会の事務局は、NPO 法人かしもむらが行っている。
- ・協議会の構成員は、加子母地域の全住民。NPO 法人の会員は、正会員と賛助会員を合わせて 600 名ほど。
- ・会費は年間 100 万円に満たないぐらいで、常勤の職員雇用は難しい。
- ・自身もマルチワークで、他の仕事もしながら事務局の仕事をしている。
- ・収益事業として明治座[※]の指定管理業務も受託している。コロナ禍は大変苦しかったが、今年度になってある程度収益が上がってきており、その収益を農村 RMO の事業に充てている。
- ・常に事務所にいる職員は 3 人。明治座の指定管理事業で雇用した職員と、コミュニティバスの運行管理の業務を兼ねたメンバーで回している。
- ・他にも市から施設管理を委託されており、そこには臨時のスタッフがいるので、そのような人たちと力を合わせながら運営している。

※明治 27 年創建の県有形民俗文化財の農村舞台

【岡崎市下山学区地域づくり協議会】

- ・協議会の事務局には岡崎市中山間政策課が入っている。
- ・活動としては、協議会には 4 つの部会がそれぞれに動いており、運営委員会で間違った方向に行っていないか情報共有を図りながら進めている。
- ・地域おこし協力隊は岡崎市に 3 人おり、そのうち 1 人が農村 RMO の形成支援を行っている。地域おこし協力隊の方は、横断的に全ての部会を手伝い、運営委員会にも出席している。
- ・協議会では、事務局や運営委員会含めて手当は発生していない。

【東米良地区 1000 年協議会】

- ・協議会の中心は NPO 法人東米良創生会になる。その事務局を私ども（社会福祉法人善仁会）の職員 2 名が担当している。

- ・マネジメント・企画については、毎週水曜日の会議で、創生会メンバーでもある地元企業の方々など複数人でいろんな話をしながら企画出しを行っている。
- ・取りまとめはNPO 法人東米良創生会の事務局が行っている。
- ・事務局の給料はもらっていない。
- ・NPO 法人東米良創生会の職員は、食堂関係の運営の収益から給料をもらっている。
- ・ドローンスクールなどの事業を行う際に、生徒さんから日当程度いただくことはある。

質問2：負担の偏りや、モチベーションの温度差が生じてうまく行かなくなることが多いと予想されるが、運営を持続できているコツなどを教えて欲しい。

【牧野委員】

【加子母むらづくり協議会】

- ・市町村合併という大きなきっかけがあり、それを乗り越えて地域としてあり続けたいという思いを共有している。
- ・今は地域の人たちも、地域を何とか守っていこうという思いを持っていることを元役場職員として強く感じている。
- ・市町村合併した平成17年からまもなく20年という大きな節目を迎えるにあたり、次のステップに向かっていくためには、もう一度、人・物・お金のことを組み立て直さないといけない状態に来ていると感じている。

【岡崎市下山学区地域づくり協議会】

- ・18年ほど下山を離れていたが、その時に自分の生まれた地域を自慢できなかった。
- ・下山に戻ってきて、昔より遥かに人が少なくなって活気がなく、このまま放っておくとこの村は消滅すると感じ、自分ができることを少しずつやっていたいかならないことには、自分の生まれた故郷がなくなってしまうのではないかという思いが、一つの大きな原動力の一つの柱になっている。
- ・下山小学校をなくしたくない、という強い思いで続けている。

【東米良地区1000年協議会】

- ・社会福祉法人善仁会の理事長は医師でもあり、20数年前から親の故郷である東米良で何かしたいという思いがあり、診療所を開設した。理事長が診療所に週1回、20数年通う中で、故郷がなくなってしまうという危機感を覚え、「世のため人のため」という基本的理念の下、2名のスタッフを派遣し、地域おこしをメインに取組んできた。
- ・スタッフは外部の人間であったため、最初は地域に受け入れられなかったが、1年、2年と続ける中で、何とか受け入れてもらえるようになった。その伴走支援として、善仁会の幹部職員が柚子の収穫に行ったり、柚子胡椒のパッケージシールを貼る手伝いなどの活動を数年続けたことで、現在に至っている。

質問3：事業連携・事業多角化を進める中で、これは良かったと思えることを1つだけ挙げるとしたら何か。

【小田切座長】

〔加子母むらづくり協議会〕

- ・外部との関係続けてきたことによって、地域の人たちも地域に誇りを感じられるということ。そして、新しい外部の学生たちと、そういった思いを共有できること。

〔岡崎市下山学区地域づくり協議会〕

- ・4つの部会毎に活動しているので判断はできにくいですが、効果が目に見えて即効性があるものは、移動手段のサービス。
- ・コミュニティバスの運営を15年ほど続けていただいているが、~~行っているが~~、そのバスに乗れない方たちのための福祉車両を運用している。
- ・福祉車両は移動の間、世間話をするので、関係性を深く作り上げていく一つの材料になっている。
- ・コミュニティバスは下山学区専門の運転手が運行しており、利用者の情報を把握しているので、利用する高齢者がバス停まで歩けなくなったなど、福祉車両との連携が可能となっている。

〔東米良地区1000年協議会〕

- ・一番の起点となったのは銀鏡小学校を拠点にしたことである。事務局のメンバーは東米良に住んでないので、銀鏡小学校に拠点を作ったことをきっかけに、NPO法人東米良創生会を立ち上げることが出来た。
- ・NPO法人東米良創生会が事業展開していく中で、一つ一つ実現したことを地域の人たちが実感し、認めてもらえるようになった。
- ・災害のときには情報共有も1本化でき、避難所にすることも出来た。

質問4：外部から人が入ってくることを、地域の方は嫌がる傾向がある。

そこをどうやって、乗り越えてきたか。

【濱田委員】

〔東米良地区1000年協議会〕

- ・東米良ではない地域で、一度まちおこしのためにNPO法人まで立ち上げたが、地域と目指す目標が違っていたために辞退した経験がある。その反省を生かし、今回東米良に挑んだ。
- ・最初はよそ者を見る目であったが、めげずに、会社や各団体の会議総会に乗り込み顔を売ってきた。
- ・後ろ盾として地域のために尽力されていた理事長の存在もあり、受け入れてもらえるようになった。

質問5：生活課題として移動支援をやりたい地域は多く、具体的な質問を伺いたい。

事故が起きたときはどうするのか。

車両、ドライバーの確保、費用はどうしているのか。

【若菜委員】

〔加子母むらづくり協議会〕

- ・コミュニティバスの運行を市から委託されたことがきっかけで、ボランティア輸送に取り組むことになった。
- ・コミュニティバスのドライバーは3人で回している。大きめの車両のため中型免許が必要となりドライバーの確保が難しいが、現状は確保できており安全に運行をしている。
- ・遠方の総合病院に通うためには、福祉輸送という形で運行するのはハードルが高いため、ボランティア輸送しか選択の余地がなかった。
- ・ボランティア輸送の車両はNPO 所有の払い下げを受けた車両を使用していた。
- ・現在、農村 RMO の事業では、外出支援、通院支援、高齢者サポート、集出荷支援などでサービスの幅を広げていく目的で、事業費を活用してリース車両を利用している。
- ・ドライバーはコミュニティバスのドライバーとは別のボランティア3名で、家族も合わせると5人で回している。
- ・経費は全て NPO の事業費からまかなっている。

〔岡崎市下山学区地域づくり協議会〕

- ・車両については、民間の自動車メーカーから社会福祉協議会へ貸与の話があり、受け口として協議会が手を挙げた。保険については社会福祉協議会が加入している。
- ・ドライバーは、生活支援部会に登録している15名ほどで対応している。
- ・利用希望者から電話を受けた後、登録ドライバーにスケジュールを確認して、ドライバーを確保している。
- ・平日は仕事をしている登録ドライバーが多いため、部会長事務局と地域おこし協力隊を含む3名でやりくりをしながら運用している状況。ドライバーの安定的な確保が一つの大きな課題。

質問6：農村 RMO と特定地域づくり事業協同組合の相性が比較的良いが、加子母むらでは、どのような構想をもっているのか。

【小田切座長】

〔加子母むらづくり協議会〕

- ・担い手不足を解消したい。
- ・事務局としての体力をつけるために事業を組み立てたい。
- ・移住してくる若者たちが、地域の中での仕事と本来の自分の仕事を繋ぎながら生計を立てていけるような暮らしが田舎でできるモデルを作ること、移住に繋げたい思いで勉強を始めている。

＜テーマ2＞ 農村 RMO における事業多角化の契機・プロセス

質問7：協議会、ネットワークなど、どのように作ってきたのか。

課題点などを教えてほしい。

【濱田委員】

〔加子母むらづくり協議会〕

- ・国レベルでは各府省庁で連携しているが、末端の自治体では、自治体の中での連携がうまくいっていないと感じる。
- ・自治体の職員は、担当外の分野の課題を自分の仕事とつなげながら解決策を考えたり、仕事を組み合わせたりする機会が少ないので、地域の団体と一緒に組み立てていけるようなきっかけができると、全国の地域でも多角的な活動が生まれるのではないかと。
- ・中津川市の地域事務所は、地域へ寄り添った立ち位置で地域の方や団体をサポートしているが、市町村合併の関係で、市役所の本所とは距離感があると感じている。
- ・地域での事業を進めていく上で一番大切なのはマンパワー。地域で頑張っている人だけが頑張っても限られたことしか出来ないため、行政と地域が良い関係性で地域活性化を進められていけたらと感じている。

〔岡崎市下山学区地域づくり協議会〕

- ・組織をうまくまとめるためには、1人の中心になる人がいて、始まったところがある。
- ・下山学区では総代会・社会福祉協議会・地区づくり委員会・PTAといった団体が元からあり、それらの核になる人を集め、まず話し合ってきた。
- ・一方で、地域住民全体まで浸透しているかと考えるとまだまだの部分もあるので、地域住民に話をしながらまとめていこうと進めているところ。

〔東米良地区 1000 年協議会〕

- ・一番は、創生会の中に各3地区の推進プロジェクトチームがあり、経営課題の解決を行ってきた。
- ・課題としては、西都市との協力体制で、まだうまく連携が取れていない。
- ・国の施策はあるが、自治体の予算化が必要なこともあり、自治体にサポートをいただきたい部分もある。伴走支援としては、一緒に考えて活動をして欲しい。

質問8：なぜ農村 RMO 化を目指したのか。

【小田切座長】

〔東米良地区 1000 年協議会〕

- ・農地保全が一番にあった。米作りを復活させる事業を実施している中で、農村 RMO で事業継承の活動が出来ると知った。
- ・ゆずの剪定技術の継承に取り組むことになり、それにはデジタル化が必要となり、農村 RMO の事業を活用出来ることが分かった。
- ・利便性向上について、地元の販売場の無人化なども農村 RMO の生活支援として活用できる。また、

鳥獣害対策や労働力調査として人がいない時期を可視化・充てる人材の調査も農村 RMO 事業で実施することが出来た。

- ・農村 RMO 推進事業は、宮崎県庁より提案をいただき、一緒に検討を進めて実施に至った。

〔岡崎市下山学区地域づくり協議会〕

- ・農用地保全が第一にあった。
- ・この制度を知った時に、農村 RMO を主導してくれる・とりまとめてくれる人材が地域にいたので、導入を選んだ。制度を知ったきっかけは、市を通じて東海農政局や国からの情報を調べて相談した。

〔加子母むらづくり協議会〕

- ・多角的に地域のことは自分たちでという思いで活動を展開していた折に、域学連携事業で地域に関わってくれた先生から農村 RMO 事業のことを知った。
- ~~・域学連携で地域の方々に関わってくれた先生が加子母むらにとって良い事業があると紹介してくれた。~~
- ・協議会には全地域から生産組合、福祉の関係団体など 70 の団体が所属。各団体で役職を兼ねる人が多く、また人が少なくなってきたり、組織の再編・見直しのタイミングであった。組織の整理・再構築のためにも農村 RMO の事業に取り組んだ。

＜テーマ3＞ 今後の展望

質問9：地域の持続可能性、次の担い手をどうするか。

どのように次の世代に関わってきたのか、また関わっていこうとしているのか。

【牧野委員】

〔加子母むらづくり協議会〕

- ・大変重要なテーマで、すごく難しい。まずは地域の子供たちに、地域に誇りを持ってもらうこと。
- ・何十年も続いている事業で「加子母教育の日」というものがあり、地域の農業や林業などの分野で地域の人たちが先生になって、子供たちへ1年間通して授業を行っている。
- ・将来、子どもたちに地元に戻ってきてもらう呼び水となるのが、外部の若者たちであったり、そこで作られる新しい関係。急激に地域で生まれる子供を増やすことはできないので、地域の子供たちと外部の若者たちが、新しい関係性を作り上げてくれることに望みを託すしかないと思う。

〔岡崎市下山学区地域づくり協議会〕

- ・後継者問題が目下の一番の課題。
- ・具体的にこれということはないが、小学校の子供たちとの交流は 20 年近く続いている。現在取り組んでいることを上から目線で言っても仕方がない。私達がいかに楽しんでやっている姿を見せるかに尽きると思っている。1人でも2人でも多くの子供が田舎って大事なんだと気づいてもらえれば、必ず戻って来ることを信じるのみ。
- ・自分たちが地元で楽しく住んで、楽しいことをしていることを子供たちに繋いでいくこと。下山小

学校をなくしたくないという思いで携わっていくということに尽きる。

〔東米良地区 1000 年協議会〕

- ・銀鏡地区では神楽と山村留学を続けるのが信念。
- ・山村留学についても、卒業した子供が大人になって戻って来て東米良の良さを知り、何かしらの活動をしてくれば。農村 RMO の事業を通すと、いろんな地域活動を知ることが出来るため、山村留学の若い世代が、尾八重地区や中尾地区に行ったり、そこで活動の輪を広げてくれることを期待している。

質問 10：こういう事業が欲しい。

こういった事業の使い勝手がいい。などの要望はあるか。

【濱田委員】

〔東米良地区 1000 年協議会〕

- ・事務局が地元の人間ではなく、また行政とあまり関わりがないため、自治体も東米良の中で一緒に伴走支援をお願いしたい。
- ・地域での会議に出て、話をして、持ち帰って、予算化をしていただきたい。地元を愛している市職員と一緒にやってやることに尽きると思う。

質問 11：田畑、不動産などの地域資産を地域が地域のものとして持つことはありえそうか。

【若菜委員】

〔東米良地区 1000 年協議会〕

- ・高齢化も進み、子供たちが帰ってこない中で、不動産問題が今後出てくる。いかに生かすかが課題だが予算がつかないと難しい。
- ・東米良地区は、空き家改修はできるが、新たに建てるのが危険区域のためできない。去年、理事長が個人で家族用とシングル用のアパートを 2 棟建築。そこへの移住誘致を今頑張っている。

＜講評＞

〔小田切座長〕

- ・本日は、3 団体及び関係する各府省にお越しいただき、農村 RMO における、各府省施策の活用、あるいは事業連携・事業多角化について議論を進めてきた。個人的なまとめになるが、次の 3 点が非常に印象的であった。
- ・1 点目は、ガチガチの工程表を作って進めてきたわけではなく、自然な連携多角化ができてきていること。その背景には、小学校を残すことや自分の地域を誇れる地域にしたいなど、そのような強い思いがあって、地域課題を一つ一つ乗り越え、その結果が多角化だったということを理解した。
- ・今後、多角化を目指す農村 RMO も、いきなり多角化をするのではなく、地域課題を確実に楽しみながら乗り越えるという姿勢が必要という事を 3 団体から学んだ。
- ・2 点目は、事業の多角化となるとマネジメント組織が必要であることも明らかになった。
- ・NPO 法人を立ち上げたり、地域おこし協力隊が関わるなど様々な工夫があることを学んだ。それと

同時に市町村基礎自治体の伴走支援が実は課題であり、各省庁間の連携は始まってきたが、市町村内部における連携が必ずしもとれておらず、この問題も重要な議論の対象となると思った。

- 3点目は農村 RMO には5つの多角化があるということ。
 - 1 番目は「攻めと守りの多角化」。これは農村 RMO を考える上で必要な姿勢だと思う。
 - 2 番目は本日の研究会のテーマでもある「事業の多角化」。
 - 3 番目は「構成メンバー、特に世代の多角化」。
 - 4 番目は「内外のポジションの多角化」。外の人当事者意識を持って内部の人間になることや、内部の人間が外の人から学ぶなど、ポジションの多角化が必要。
 - 5 番目は「多能工・マルチワーク」。一人の人間が色々な業務を果たしていくことが特に過疎化が進む農山村では必要だと思う。
- この5つの多角化をどのように進めるのか、これが農村 RMO の課題であることが今回の研究会でかなり明確になった。